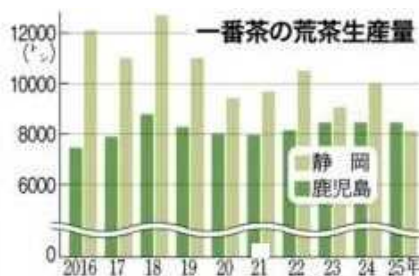


2025年産一番茶の
摘採面積・荒茶生産量

24年産一番茶の荒茶生産量は、鹿児島が8450トで静岡が1万ト。25年産は鹿児島がほぼ横ばいだったことにに対し、静岡は前年比19%減となったことで逆転した。荒茶生産量で一番茶が占める割合は24年産で鹿児島31・3%、静岡38・8%。

摘採面積は鹿児島7670ト(前年比2%減)、静岡1万5000ト(同9%減)。生葉収穫量は鹿児島4万5200ト(同1%増)、静岡3万9900ト(同22%減)。10畝当たり4月上旬から5月上旬にかけて最低気温の低い日が多く、芽の伸長が抑えられたことが収量減につながった。鹿児島は4月以降に晴れ間が多く、適度な降水量だったため生育が順調で、昨年並みの収量を維持できたとしている。

県農産園芸課は「鹿児島は摘採面積を確保でき、海外需要の高い抹茶の原料に使われるてん茶生産への転換が進んでいることが大きい」と分析した。

一番茶の作物統計調査は、主産地5府県(鹿児島、静岡、三重、京都、埼玉)をまとめる。摘採面積は2万2300ト(前年比5%減)、荒茶生産量は2万ト(同10%減)だった。

2025年産一番茶の荒茶生産量で、鹿児島県は8440トとなり、初めて全国1位になったことが20日分かった。1991年に農林水産省が一番茶の調査を始めて以来、首位だった静岡県は8120トで2位となった。鹿児島県は、一番茶を含む通年の荒茶生産量で2024年に初の日本一となっており、25年産でも期待が持てそうだ。

25年生産量
8440ト
静岡を320ト上回る

県産
初の1位

一番茶の若葉を摘み取る農家

11月3日、西之表市吉田



2025年8月21日付1面

【問1】 見出しの空欄には、越冬後の新芽を最初に摘採する茶で新茶とも呼ばれるものが入ります。漢字3文字で答えましょう。 ()

【問2】 2025 年度産一番茶の摘採面積・荒茶生産量のグラフを見て、鹿児島県と静岡県を比較した正しい説明を次のア～エから一つ選びましょう。 ()

- ア 鹿児島は静岡よりも摘採面積が広く、荒茶生産量も多い
- イ 鹿児島は静岡よりも摘採面積が狭いが、荒茶生産量が多い
- ウ 鹿児島は静岡よりも摘採面積は狭く、荒茶生産量も少ない
- エ 鹿児島は静岡よりも摘採面積は広いが、荒茶生産量は少ない

【問3】 一番茶の荒茶生産量のグラフを見ると、静岡は 2024 年度に比べ 2025 年度の生産量が減少しています。その理由を記事中の語句を使って答えましょう。 ()

【問4】 鹿児島県では、同じ茶葉でも抹茶の原料に使われるてん茶生産への転換が進んでいるのはなぜですか。
次の空欄に当てはまる漢字4文字を答えましょう。
() が高いから

【調べてみよう】 茶の栽培方法や製造工程の違いについて調べてみよう。

* 習っていない漢字のよみがなや難しい用字用語の解説

荒茶（あら・ちゃ）＝摘み取った生の茶葉をすぐに蒸してもみ、乾燥させた一次加工の半製品。	海外需要（かい・がい・じゅ・よう）の高い＝海外から多くの引き合いがあること。
摘採（てき・さい）＝植物や花などをつまみ取ること	てん茶＝日光を遮って育てた茶葉を蒸してもまずに乾燥させたお茶で、独特のうま味と鮮やかな緑色が
を指し、茶やノリなどの作物を収穫すること。	特徴。抹茶はこれを粉碎したもの。
占（し）める 生葉（なま・ば） 上旬（じょう・じゅん） 伸長（しん・ちょう）＝長さや力などが	転換（てん・かん）＝切り替え。
伸びること、伸ばすこと。	分析（ぶん・せき）